

Doctor Faustus の墮地獄

— 魔女の破滅への道程 —

横 尾 元 意

I 研究動向と問題の所在

C. Marlowe の *Dr. Faustus* には不確定要素が多いにも拘らず、⁽¹⁾ その主人公の墮地獄の原因について多数の論文が、その解明を試みている。W. W. Greg は、この劇では spirit は devil を意味しており、Faustus が Helen と情交した時彼女は spirit であった。それで Faustus は許されない demoniality の罪を犯し地獄に落ちることになったと主張して、強い影響を与えた。⁽²⁾ しかし、この意見に反論がなかったわけではない。N. Kiessling は C. Marlowe 以前の demoniality への言及より、悪霊との交合は許されうる罪であって、必ずしも死にあたる罪ではなかったという見解を導き出し、従って、Faustus が Helen と接吻するとき地獄落ちに定まると主張するのは賢明ではなく、Faustus の罪の本質は自分の罪を悪魔の罪よりも悪いと自分に思わせる pride ⁽³⁾ にあるとして、J. C. Maxwell の意見を支持している。Leo Kirschbaum の意見も、これに似かよっている。彼は Faustus の求めているのは意志と感覚の完全な充足であって、しかも Faustus 自身、これが自分の自由意志と選択による行為であることを了解しており、また彼が、神の恵みを自分は受けられないと結論するのは病んだ ego つまり謙遜の欠如の為であると論じている。⁽⁴⁾

一方、M. M. Mahood は Humanism の観点から *Dr. Faustus* を分析して、その中に勝ち誇る個人主義と絶望的な運命主義の拮抗を見ながら、Faustus の絶望はキリスト教的というよりも、むしろ異教的で stoical であって、ルネッサンス人と同様、彼は自己充足の可能性を自信をもって言い切り与えられる恵みを拒絶すると説明している。⁽⁵⁾

しかしながら、Faustus の地獄落ちに関しては 16 世紀の宗教上の思想背景に、その原因を求めるのが趨勢のようである。Lily B. Campbell は、Faustus が神を捨てて悪魔達の助けを呼び求め、魂を悪魔に与える契約を結ぶことを彼の罪に数えるとともに、*Dr. Faustus* を Cases of Conscience の面から捉え、Francis Spira の場合と Faustus の場合の共通点に着目して論を進め、Faustus は Mephistophilis 等によって絶望を吹き込まれ、信仰と希望を捨てて、キリストに示された神の恵みを拒絶するようにされると墮地獄の主要原因を解明している。⁽⁶⁾ その他、Arieh Sachs も絶望の罪を地獄落ちの原因と考えている。⁽⁷⁾ これを押し進めた形で Pauline Honderich がある。彼は *Dr. Faustus* の悲劇的大団円の解釈にかかわる問題の多くは 16 世紀の神学的背景すなわちカルビニズムの理解が不十分なことから生じていると前置きして、当時、墮落した証拠また墮地獄の原因とも考えられていた the sin of despair によって、すべての意志力 (will) と精力 (energy) を奪われ、自分の犯した罪の認識にもなあって、自分は神の選びの中に入っていないと感じるようになり、深い絶望へと落ち込んでいくと Faustus の破滅のメカニズムを説明して、さらに Faustus と Helen の交合を彼の墮地獄の原因とする説明は不必要であり、劇自体 また その材源が意図していることではないと主張している。⁽⁸⁾

ところが、この考え方によっては、Honderich 自身も認めているように、何故 Old Man と Good Angel が good adviser という伝統的な道徳劇上の役割から逸脱して、最後になる前に Faustus を見捨て

るのか説明がつかないのである。また、Faustus は劇の各所で the sin of despair を犯しているのに、どうしてあの時点で彼の墮地獄が決定的なものとならねばならないのか、さらに墮地獄の原因について、Good Angel は thou didst love the world (v. ii. 98) と言い、Faustus 自身は the Scholars に

Lucifer and Mephistophilis. Ah, gentlemen,

I gave them my soul for my cunning. (V. ii. 59-60)

と自分の破滅の原因を説明している。どうして登場人物達の意見が the sin of despair に収斂しないのか疑問が残るのである。さて、Faustus の魂は、作品では悪魔達によって連れ去られたことになっているが、*Conflict of Conscience* のように自殺したと考えるべきなのであろうか。また、墮地獄が決まっているのであるから、主人公の死ぬ方法は材源に従ったまでのことなのだろうか。⁽⁹⁾さらに、主人公が自由意志によって、悪魔と契約を結んで魂を売るという由由しい罪を犯しているのに、Nathaniel Woods の *Conflict of Conscience* と同様にカルビニズムの影響下にあるとこの劇を断じるのは疑問の余地があると言える。少なくとも、*Dr. Faustus* には主人公が the sin of despair の為だけで破滅したと割り切ることの出来ない点があるのである。主人公 Faustus が魔術の替りに悪魔に魂を売り渡したこと、その契約に基づいて世に耽溺したこと、Faustus のある行為によって墮地獄が決定されたことをも内包する思想・原因をこの劇の背後に探ろうとするのが、この論考の目的である。

II Faustus と魔女政策

1140年頃、Gratian は、獣の背に乗って夜に空中を飛んだと信じたり告白したりしている女性は、悪魔に墮落させられ悪霊の迷妄に惑わさ

れて精神的なことを実際のことと考えているのであって、悪魔に囚れの身となっていると説明しながら、教区内の邪悪な魔術と悪魔によって引き起される悪行を根絶しなければならないと司教達に警告している。⁽¹⁰⁾ところが、1232年の Pope Gregory IX の通達の中では、邪悪なものたちの集会を現実のものと考えており、その叙述はのちの Sabbat に特徴的な事柄をほとんど含んでいるのである。⁽¹¹⁾当時、魔術は信仰の欠如あるいは迷信から生じたもので、悪霊も人の想像物に過ぎないと主張する人もいたようであるが、St. Thomas Aquinas などもカトリックの信仰を支持して、悪霊は存在し、その業によって妊娠が妨げられることがあると考えている。⁽¹²⁾さて、Pope Alexander IV は、その対応について、異端審問官は異端の明らかな印が見られない時は、Divination あるいは Sorcery の訴えには係わるべきでないと考えていた。⁽¹³⁾しかし、1320年頃になると、魔女は悪霊に犠牲を捧げ、契約書を書き、ロウ人形を作り、魔術を用いようとし、さらに洗礼の秘蹟を乱用していると考えられるようになり、その乱用の認められる場合、異端者と同様に、sorcerers と witches を取り調べる事が出来るようになるのである。⁽¹⁴⁾そして、当時の状況は Pope John XXII にとって、それを敢えて行おうとする人には破門宣告をすると布告さざるを得ない程度のものに思われたのである。⁽¹⁵⁾それで、1484年 Pope Innocent VIII は異端審問官に、いかなる人をも取り調べ、強制し、罰する権限を与え、それによって H. Krämer と J. Sprenger に *Malleus Maleficarum* を書く機会をもたらしただのである。⁽¹⁶⁾その後、魔女裁判は異端審問として正当化され、魔女への追求が厳しくなっていくのである。そして、魔女狩りが、1600年を中心とした一世紀の間、公権力によって組織的に推し進められたのである。⁽¹⁷⁾

ところで、これと期を同じくして、Faustus 伝説が出来あがってくるのである。この Faustus に当ると考えられる実在の人物 George Faustus と Johannes Faustus は同一人物と考えられるが、1510年頃

活躍したドイツの魔術師である。当時の人々は、魂を悪魔に売る契約をしたことを公言し自慢さえした Faustus 博士を、地獄の霊の助けによって人間の感覚を誂かし不思議な体験をさせる魔術師と考えていた。そして、この学識豊かな魔術師の技術を魔女たちに不当に帰された魔術と同種類のものとは見なさず、まして、彼を告発しようなどとは思⁽¹⁸⁾いも及ばなかったのである。その原因を C. Marlowe の *Dr. Faustus* の材源の一つと考えられている *English Faustus Book* (1592) に Faustus の魔術の特徴を尋ねると、人畜に致命的な破壊をもたらさず、魔術を解けば復元し、従って、他人に危害を加え財産を損壊させるだけの魔女の劣悪な魔術とは異っているのである。

さて、イギリスの魔女裁判によって初めて死刑が行われたのは、1566年のエリザベス一世の時代であった。そして、1684年に最後の処刑が実施される120年間に、約1,000名の絞首刑者を出すのである。平均して訴えられたものの19%に過ぎないとしても、やはり、魔女裁判がイギリスでも行われたことに変りはなく、また Marlowe の *Dr. Faustus* が創作されたと思われる1590年前後が、魔女として起訴された人数また処刑された人数の両方とも、一つのピークを成しているのは注目⁽¹⁹⁾に値する。

それでは、イギリスの政府は Conjuraton, Enchantment, Witchcraft に対して、具体的にどのような政策をとっていたのであろうか。エリザベス一世によって1563年に再制定された *An Act against Conjurations, Enchantments, and Witchcrafts* を考察⁽²⁰⁾してみたい。この法令によると、呪文によって悪霊を呼び出すことが可能であり、Witchcraft, Conjuraton, Sorcery によって、他人の身体、物品、家畜に危害を加えたり、さらには殺すことも出来ると考えられている。また、これらを用いて、金・銀・盗品・見失った物品をどこで発見出来るかを予言するのにも使われていることも明らかである。また、この法令

は *Conjuration, Enchantment, Charm, Sorcery, Witchcraft* を一
緒に取り扱っており、同じく処罰の対象としているのである。さて、こ
の法令の前文に目を留めてみると、単に魔術などを使った本人が破滅し
たり、隣人の財産を損壊させたり、イギリス国内の事物を崩壊させたり
するのを禁止するためでなく、国家レベルでの信仰問題として捉えてい
ると言えるのである。まず、魔女は行った刑事犯的な「行為」のためで
はなく、その行為以前の「悪魔との結託」というキリスト教的な「魂の
墮落」のために裁かれることになるのである。このような状況下にあっ
て、*Faustus* 物語がイギリスに導入され、単に娯楽を目的として劇の
題材になったとは考えられず、むしろ、*Faustus* は *witch* と識別され
ずに取り扱われる可能性もあったと考えられるのである。

Ⅲ *Dr. Faustus* と魔女の行為

論理学、哲学、医学、法学、神学に飽き足らない *Faustus* は、神の
ようになりたいと思って魔術を自分の研究課題と定め、*Valdes* と *Cor-*
nelius にその手解きを受けて、さうそく、その晩のうちに *Sint mihi*
Dei Acherontis propitii! Valeat numen triplex Jehovae. (I. iii.
16)⁽²¹⁾ と始まる呪文で *Mephistophilis* を呼び出し、自分は立派な魔術師
になったと狂喜する。しかし、実際、*Mephistophilis* が姿を現わした
のは *Faustus* の習い覚えた魔術の力のためではないことが明らかにな
る。

That was the cause, but yet *per accidens*,

For when we hear one rack the name of God,

Abjure the Scriptures and his Savior Christ,

We fly in hope to get his glorious soul; (I. iii. 46-9)

Mephistophilis が現われたのは、*Faustus* の思惑と違って、彼の瀆神

行為に起因していたのである。⁽²²⁾

その時、Faustus は、あまりにも魔術に魅せられていたので、自分の魂を取るに足りないものと見なして、今や神に失望して永遠の死を招いてしまったと自分に言い聞かせて、自らの血で Lucifer への契約書を認めて Mephistophilis に手渡すのである。⁽²³⁾

Faustus が神を拒否し悪魔と契約を結ぶ経緯の中で、他人に危害を加えるという魔女の特徴と思われる点に関連して、⁽²⁴⁾彼は契約の条件として Mephistophilis に次のように言っている。

To slay mine enemies, and aid my friends,
And always be obedient to my will. (I. iii. 96-7)

さらに、Lucifer 達にこのような約束をしている。

And Faustus vows never to look to heaven,
Never to name God, or to pray to him,
To burn his Scriptures, slay his ministers,
And make my spirits pull his churches down.

(II. ii. 97-100)

魔女による嬰兒の殺害に係わるものとして、Faustus はこうも言っている。

To him I'll build an altar and a church,
And offer lukewarm blood of new-born babes.

(II. i. 13-4)

Faustus の弟子で魔術に興味を持ち、それに熟達したいと思っている Wagner の台詞に魔女を想起させる語が見られる。

for, sirrah, if thou dost not presently bind
thyself to me for seven years, I'll turn all
the lice about thee into familiars and make
them tear thee in pieces. (I. IV. 18-21)

下線を施したこの *familiar(s)* という語は、魔女たちが飼育している動物を意味しており、*imp(s)* とも言われ、イギリスでは彼等がそれを自らの血で養うと考えられ、その時体についての斑点が悪魔の斑点と混同されて、イギリスの魔女裁判において決定的な決めてとされたのである。従って、この台詞の「霊獣にあなた（の体）を食いつくさせる」ということは、魔女と見なされて処刑されるという意味も含まれてくるのである。*familiar(s)*（霊獣）とは具体的には、ひきがえる、猫、犬、鼠、兎などと考えられており、これが次のような台詞の中にも引き継がれていくのである。⁽²⁵⁾

Ay, sirrah. I'll teach thee to turn thyself to
a dog, or a cat, or a mouse, or a rat, or any thing.

(I. iv. 38-9)

Faustus は、天文学上の秘密を探るために、竜の引く戦車に乗ってオリンポス山上まで登ったり、また世界地誌を調べるために竜の背に跨がって天翔たりする。一方、魔女は竜、山羊、杖、箒、悪魔などに乗って、空中を飛行して *Sabbat* に出掛けて行くと考えられていた。このような観点から見ると、*Faustus* が *Mephistophilis* とともにローマ法王庁で法王の祝福を受けることは、ローマ・カトリックへの嘲弄と考えられるが、法王の姿をした *Lucifer* より祝福を受けるという魔女入会式上、重要な儀式を執り行ったことにもなるのである。⁽²⁶⁾

また、この劇と魔女との関わりを醸し出している台詞として挙げるならば、*Benvolio* が *Faustus* への復讐に燃えながら *Martino* と交す会話を例として出すことが出来る。

B. First, on his head, in quittance of my wrongs,
I'll nail huge forked horns and let them hang
Within the window where he yoked me first,
That all the world may see my just revenge.

M. What use shall we put his beard to?

B. We'll sell it to a chimney-sweeper. It will
wear out ten birchen brooms, I warrant you.

(IV. iii. 55-61)

下線を引いた nail は名詞では「爪」という意味を持っているが、一方 forked には「二又に分れている」という意味がある。ところで、悪魔の特徴の一つとして足の爪が二股に分かれているということを挙げる事が出来るのである。また、魔女は Sabbat に行く時、煙突から出ると考えられ、従って魔女になりやすい人に煙突清掃人が有り、しかも箒に跨がって飛んで行くとされていたのである。それ故に、nail, forked, chimney-sweeper, brooms という語が群って使用されるのも理由のないことではないのである。

さて、Old Man に真の神の慈悲を求め絶望を避けるように勧められながらも Mephistophilis の脅迫に屈して、再び誓約書を書いて Lucifer との契約を誠実に守ろうとする Faustus は、この誓いを破らさせるような想念を払う為に、以前目にした美しい Helen を自分の愛人にしてくれるように Mephistophilis に頼み 自分の思いを遂げるのである。ところで、Sabbat が興に入ると男魔女は女色魔と女魔女は男色魔と淫らな性行為に及ぶのであるが、⁽²⁷⁾これは最終的に行きつく魔女の特徴的な行為の一つなのである。Faustus と Helen の姿をした demon との性行為が、これに当るのである。

そして、契約の期限が一刻一刻と迫る中で、Faustus は神の救いを受けたいと切望するが時すでに遅く、遂に、魔女の例に見られる如く Lucifer 達によって身体を引き裂かれ魂を地獄に持ち去られるのである。

材源にも見られるように、Faustus は単なる魔術師というよりも、悪魔と契約を結んで不思議を行なう者であり彼の行為も魔女のそれと

大変似かよっている。また、イギリスには *Dr. Faustus* の書かれた当時、その主人公が魔女と同種類のものとして見做されるのに十分な社会環境が備っており、また、このテキストは、材源である *English Faustus Book* を、そのような枠組みの中で潤色した形で書きあげられているのである。

IV *Faustus* の墮地獄と Luther の魔女観

1558年から1607年までのロンドン周辺5州の魔女処刑者数を調べてみると、73人中56人が Essex 州であり全体の77%に及んでいる。Essex 州は C. Marlowe が成長期を過した Kent 州に隣接しており、Kent 州自体でも8人の処刑者を出し他の3州よりずば抜けて多いのである。そして Essex 州で処刑者数のピークとなる時期に、⁽²⁸⁾ Marlowe はその隣の Cambridge に来て、1581年3月 Corpus Christi College に僧職をめざして入学し神学を専攻したのである。⁽²⁹⁾ そうすると、信仰との関わりで取り挙げられていた魔女問題について、彼は無関心ではありえない環境にあったはずであり、従って、彼自身これに係わる神学上の文書を尋ね思索したと考えられるのである。

ところで、この魔女問題を正面から取り扱っているのは J. Calvin ではなくて Martin Luther (1483-1546) なのである。Witchcraft, Sorcery を彼は身近かな問題として『ガラテヤ人への手紙』の注解の中で論じている。その中で、Witchcraft と Sorcery は悪魔の業であって、それらによって悪魔は人々を傷つけるだけでなく、神の許しがあればときどき人々を殺しもすると前置きして、ある人がキリストを否認したためにキリストは神の前で自分を裁くとその人が想像するのは悪魔の迷妄によって盲目にされているためであり、そのような想像は聖書に根拠のないキリスト観であると言っている。そして、その想像にあまりにもと

らわれると、どんな警告も慰めも神の約束もそれから引き戻すことが出来ず、絶望し悲惨にも自殺すると Dr. Kraws of Halle という人を例に出して説明している。⁽³⁰⁾ Luther は絶望の罪を墮地獄の主たる原因とは考えておらず、絶望するのはキリストが自分を裁くと悪魔の迷妄によって思い込む結果なのである。そして、Luther が魔女達を自分達の意志で神を否認して悪魔の迷妄に惑わされていると考え、神によって墮地獄に予定されている人とは見做さないと同様に、Faustus は自分が神の選びの中に入っていなかったとは考えていないのである。⁽³¹⁾ こうしてみると、Faustus が悪魔と契約し絶望の罪を犯した為に墮地獄に定まるといふ考え方は当らないと言える。しかしながら、Luther は悪魔と魔女について、「悪魔を招いたものは、悪魔から逃れることは出来ない」と表明し Faustus の運命を予示している。⁽³²⁾

それでは、恵み深い神がどんな原因から Faustus を見捨て悪魔の手に委ねるのであろうか。五幕一場で Old Man が Faustus に

Though thou hast now offended like a man,
Do not persevere in it like a devil.
Yet, yet, thou hast an amiable soul,
If sin by custom grow not into nature.
Then, Faustus, will repentance come too late;

(V. i. 41-5)

と警告するとき、彼の魂は救われる可能性を持っていたのである。ところが、この場の終りで Old Man が

Accursed Faustus, miserable man,
That from thy soul exclud'st the grace of heaven
And fliest the throne of his tribunal seat!

(V. i. 119-21)

という台詞を残して Faustus を見放して立ち去ってしまうのである。

そして、もはや五幕二場では、Faustus は神に呼びかけたり両手を天に差し伸べる自由を悪魔達に奪われている。また、Faustus が悪魔を欺こうと思いつくとしても、“all in vain” (V. ii. 15) と Mephistophilis は自信ありげに言っている。さらに、Faustus 自身も “nothing can rescue me” (V. ii. 78) と自分の救いの不可能なことを認めている。そして、Good Angel の言うように、今や地獄が天の至福を失った Faustus を飲み込もうとしているのである。こうしてみると、五幕一場70行から119行までの間に、神によって Faustus の見捨てられる決定的原因が秘んでいるはずなのである。

それは、魂の救いを疎んじてこの世だけの肉体に固執している Faustus が、Mephistophilis から肉体を引き裂いてしまうと脅されて、再度、契約書を書いたためであろうか。これは魔女行為の中でも最初の行為であり、Faustus の墮地獄の原因に数えられてきた事柄でもある。しかしながら、それを書く Faustus の動機とそれに対する Mephistophilis の台詞から、これが Faustus の墮地獄の決定的原因とは考えられない。それとも、Mephistophilis を使って信仰深い Old Man に危害を加えようとしたためであろうか。これは魔女行為の一つと数えられ、法律上、死刑・終身刑・一年の入牢の刑に当るものである⁽³³⁾。しかし、Old Man が Faustus を去る時の台詞からすると、Old Man に危害を加えようとする行為自体は、その原因とは言われていないのである。それでは、美しい Helen の姿をした女色魔との情交の為であろうか。しかし、冒頭で述べた通り、悪霊と情交しても赦されたという記録があり、それ自体は極悪であっても直接的に墮地獄と結びつく行為ではなかったと言える。さて、Faustus の墮地獄の原因に数えられたこれらの行為のどこに Old Man をして「天の恵みを締め出し、神の審きの座から逃げ出す」と言わしめる要因が含まれているのであろうか。

ここで、C. Marlowe が見知っていたと思われる Witchcraft についての Luther の考えに目を留めてみたい。彼は次のように言っている。Witchcraft は悪魔と契約を結び、偶像礼拝は偽りの神と契約を結ぶものである。従って、Witchcraft は一種の偶像礼拝と言いうる。また、視点を換えてみると、偶像礼拝者たちは神に魔術をかけて、自分の心の伴わぬ礼拝と自分かたくな行為によって、自分達を義とし永遠の生命を与えるような神を作り上げてしまうのであるから、偶像礼拝は靈的な Witchcraft であるとも考えられる。ところで、もし彼等がこの邪悪な神観に固執するならば、偶像礼拝の為に死に地獄落ちするだろうと Luther は述べている。⁽³⁴⁾

さて、Faustus の破滅の決定的な原因となる偶像礼拝が、彼のどの行為に込められているのかを吟味する前に、果して Luther は偶像礼拝をどのように考えていたのかを明らかにして、推論の妥当性を保証しておく必要がある。Luther は、『十誡の要義』の中で、偶像礼拝者すなわちモーセの十戒の第一の戒めに背くものに次のような註解を加えている。

第一誡に背くもの

自ら困難に際して、魔術や不思議な力に頼り、悪魔の徒党を結ぼうとする者。

書状、異徴、草本、呪語、護符、其他此種のものを用ひる者。

魔法杖、宝物探しの祈禱、水晶鏡の卜筮、魔術衣の着用、牛乳盗みをなす者。

選定された日や天界の象徴や卜占者の妄見に基いて、己れの行為及び生活を判定する者。

己れ自身と其家畜と家と子等とあらゆる所有とを、狼や鉄や火や水や其他の損害に対して、怪奇な祈禱を以て祝福した誓願する者。

自己の不幸困難を悪魔または悪しき人間に帰し、かくて愛と讚美とを以て悪また善として之を唯だ神から受け、また更に感謝と心からの信頼とを以て神に帰することをなさない者。

神を試み、身体にせよ靈魂にせよ己れを無用の危険に委ねる者。

己れの敬虔、知性、其他の精神的才能を自負し誇る者。

靈魂の要求を忘れて、唯だ地上的な利益のためにのみ、神と聖者とを敬ぶ者。

不断に神への信頼を有せず、またそのあらゆる行為に於て神の慈愛を確信せざる者。

信仰をも或ひは神の恩寵をも疑ふ者。

他の人に対し成し得る限り、其不信仰と疑惑とを制止せず、其信仰と神の恩寵の信頼とを援助しない者。

而して凡ての不信仰、絶望、妄信が、之に属する。⁽³⁵⁾

上記の引用を見ると、Luther の偶像礼拝者の叙述が、いかに Faustus を克明に説明しているかが分る。そして、Luther にとって Witchcraft が偶像礼拝の中心的内容を構成しており、偶像礼拝が Witchcraft の核心なのである。

すると、悪霊と考えられる Helen に、Faustus がいかなる姿勢を取っているかが問題として浮び上ってくる。

2人の Cupids に伴われて登場した Helen に接吻して法悦に浸り、Faustus は次のように口走っている。

Sweet Helen, make me immortal with a kiss.

Her lips suck forth my soul. See where it flies!

Come, Helen, come, give me my soul again.

Here will I dwell, for heaven is in these lips,

And all is dross that is not Helena.

(V. i. 101-5)

ここで、Faustus は自分を immortal にしてくれるようにと当然、神に求めるべきことを Helen に願っている。また、自分の魂を Helen と弄び、Helen を自分に魂を与えるもののように見立てている。さらに、彼女の口唇には地獄があるのに、天国があると言ってそこに安住を求め、Helen との合一に耽溺している。諸学問に飽き足らず、神のよ

うになりたいという高慢から魔術に心を引かれ、悪魔と契約を結んで始まる Faustus の偶像礼拝は、女色魔とみなされる悪霊 Helen との情交という魔女の最終にして極悪な行為の中に、その頂点を示しているのである。それで、遂に、Old Man は、Faustus の偶像礼拝が彼の本性に成っていると見てとり、⁽³⁶⁾「天の恵みを魂より締め出し、神の審きの座から逃げ出」したと嘆いて彼を見離し、⁽³⁷⁾ Good Angel も、彼は「世を愛し過ぎた」と言って立ち去り、Luther の言うように Faustus は地獄落ちすることになるのである。

V 結 論

C. Marlowe の *Doctor Faustus* はイギリスに魔女狩り扇風の吹き荒ぶ時期に、1592年頃 P. F. Gent によって英訳された *English Faustus Book* などを材源にして書かれたと思われる。そして、当時のイギリスには、Faustus を魔女と相似したものと看做すに十分な環境があり、それ故に作品は魔女に関する記事を含み、主人公 Faustus を魔女に見立てている節があるのである。そのような視点から、Faustus の墮地獄の原因を Luther の見解より再検討してみると、それは主人公 Faustus の偶像礼拝が彼の本性にまでなったことに起因することが明らかになる。

さて、墮地獄が決定する前に、彼は破滅の端緒であり魔女行為の最初である悪魔との契約を再び繰り返し、また信仰深い老人に危害を加えようとする。この老人は1587年の Johann Spies 版によれば、⁽³⁸⁾ Faustus の隣人にして敬虔な医師として、*English Faustus Book* には正直で有徳な年老いたクリスチャンとして登場する。そして C. Marlowe の *Doctor Faustus* では、天使の姿も見え、自分の信仰の勝利を確信しており Faustus の救いについても判断を下せる、いわばキリストを思い

起させる登場人物である。⁽³⁹⁾そして、Faustus は demon である Helen に心を奪われて、魔女行為でも最も醜悪な行為に至るのである。このように Faustus は最後に当って、再度、魔女の破滅への道程を繰り返して、女色魔 Helen との交合に及ぶのである。ここで、彼は自らの自由意志で、この罪を犯している。これについて、St. Thomas Aquinas は、こう言っている。

All sins are not committed at the devil's instigation, but some are due to the free-will and the corruption of the flesh.⁽⁴⁰⁾

それ故に、Old Man と Good Angel は、Faustus の偶像礼拝は彼の本性になったとして、道徳劇の伝統から逸脱して彼を見捨ててしまい、Faustus は悪魔達の手になされるのである。

※ 本稿はテキストとして Irving Ribner, ed., *The Complete Plays of Christopher Marlowe* (Indianapolis: Bobbs-Merrill Educational Publishing, 1977) を用いた。

— 注 —

- (1) 渡辺一雄, 「C. Marlowe 作 “Dr. Faustus”」(北海道学芸大学紀要11, 1960), pp. 20-34.
- (2) W. W. Greg, “The Damnation of Faustus,” *Modern Language Review*, XLI (1946), pp. 97-107.
- (3) Nicholas Kiessling, “Doctor Faustus and the Sin of Demoniality,” *Studies in English Literature 1500-1900*, 15 (1975), pp. 205-11.
- (4) Leo Kirschbaum, “Marlowe’s Faustus: A Reconsideration,” *Review of English Studies*, XIX (1943), pp. 225-41.
- (5) Lily B. Campbell, “Doctor Faustus: A Case of Conscience,” *PMLA*, LXVII (1952), p. 222.
- (6) *Ibid.*, pp. 219-39.

- (7) Arieh Sachs, "The Religious Despair of Doctor Faustus," *Journal of English and Germanic Philology*, LXIII (1964), pp. 625-47.
- (8) Pauline Honderich, "John Calvin and Doctor Faustus," *Modern English Review*, 68 (1973), pp. 1-13.
- (9) F. S. Boas, ed., *Doctor Faustus, The Works and Life of C. Marlowe*, V (New York: Gordian Press, Inc., 1930-33), pp. 177-95.
- (10) *Witchcraft in Europe 1100-1700: A Documentary History*, trans. and ed. Alan C. Kors & Edward Peters (Philadelphia: Univ. of Pennsylvania, 1978), pp. 29-31.
- (11) *Ibid.*, pp. 48-9.
- (12) *Ibid.*, pp. 63-73.
- (13) *Ibid.*, p. 79.
- (14) *Ibid.*, pp. 80-1.
- (15) *Ibid.*, p. 82.
- (16) *Ibid.*, pp. 107-12.
- (17) 森島恒雄, 『魔女狩り』(岩波新書, 1972), pp. 20-73.
トレヴァー=ローパー, 『宗教改革と社会変動』小川, 石坂, 荒木訳 (未来社, 1978), pp. 127-247.
- (18) K・バッシュビッツ, 『魔女と魔女裁判』川端豊彦, 坂井洲二訳 (法政大学出版局, 1977), pp. 19-49.
Montague Summers, *The History of Witchcraft and Demonology*, (Boston: Routledge & Kegan Paul Ltd., 1969), pp. 280-4.
Edward Peters, *The Magician the Witch and the Law*, (The Harvester Press, 1978), p. xii.
- (19) 浜林正夫, 「イギリス革命と魔女狩り」(岩波書店『思想』第644号, 1978), pp. 33-48.
- (20) "An Act against Conjurations, Enchantments, and Witchcrafts," *The Encyclopedia of Witchcraft and Demonology*, ed. R. H. Robbins (New York: Crown Publishers, Inc., 1970), pp. 156-9.
- (21) May the gods of Acheron be propitious to me. Let the triple name of Jehova (the trinity) be gone.
- (22) *Witchcraft in Europe*, p. 229.
- (23) 森島恒雄, pp. 76-94.
- (24) 浜林正夫, 『魔女の社会史』(未来社, 1978), pp. 53-67.
- (25) 坂井洲二, 「ヨーロッパの憑きもの信仰—魔女と魔女裁判—その過去と現在」(関

64 *Doctor Faustus* の墮地獄

- 西医科大学教養部紀要, 1961), p. 9, p. 23.
- (26) *Doctor Faustus* III. i. 93, 195.
- 坂井洲二, *op. cit.*, pp. 16-7.
- (27) "H. Krämer and J. Sprenger, *The Malleus Maleficarum*," *Witchcraft in Europe*, pp. 114-145.
- (28) 浜林正夫, *op. cit.*, pp. 34-5.
- (29) John H. Ingram, *Christopher Marlowe and His Associates*. (New York: Cooper Square Publishers, Inc., 1970), pp. 52-98.
- (30) *Witchcraft in Europe*, pp. 195-201.
- (31) *Doctor Faustus* V. ii. 87-8, 96-8, 138, 163-5.
- (32) St. Thomas Aquinas も *Commentary on the Four Books of Sentences* の中で同じ趣旨を述べている: *Witchcraft in Europe*, p. 74.
- (33) 吉田八岑, 『魔女異聞考』(新泉社, 1976), pp. 178-9.
- (34) *Witchcraft in Europe*, p. 201.
- (35) マルチン・ルター, 『信仰要義』石原謙訳(岩波文庫, 1958), pp. 150-2.
- (36) *Doctor Faustus* V. i. 43-5.
- (37) To every man there are assigned two angels, the good for protection, the evil for trial: *Witchcraft in Europe*, p. 38 ll. 6-7.
- (38) 『ファウスト』解説, 阿部次郎全集第4巻(角川書店, 1961), pp. 175.
- (39) ダニエル書7章9, 13, 22節, 黙示録1章14節。
- (40) *Witchcraft in Europe*, p. 68 ll. 6-7.